

近代短歌に現われた子ども (十五)



大塚 雅彦

(33) 吉野秀雄

秀雄は明治三十五年、群馬県高崎市に生まれた。生家は織物問屋「吉野藤」(父の名は藤一郎)商店であった。県立高崎商業から慶大経済学部に進んだが、胸を病み中退。以後、国文学を独修した。大正十五年栗林はつと結婚、その後、病気がちであったが、昭和六年上州から鎌倉に転居。同八年「吉野藤」東京支店に勤務。十九年妻はつ逝去。戦時中、上州富岡に疎開し、終戦を迎えた。二十一年四月に、鎌倉アカデミア文学部の教師となる。二十二年八木登美子(詩人の故八木重吉未亡人だった)と再婚。以後も肺患等の病苦とたたかいつつ文筆生活をしたが、昭和四十二年七月十三日心臓喘息のため逝去。六十五才である。彼の命日は

「艸心忌」と称し、毎年その日には鎌倉の彼の墓のある瑞泉寺で、彼を偲ぶ法要が催される、私も二度ほど参加したが、太宰治の「桜桃忌」のように派手ではないものの、心のこもったものであり、また、参加者も年輩の人が多いようである。

彼は前述の如く独学であったが、大正十三年から作歌を始め、正岡子規の『竹乃里歌』を手本にした。翌十四年会津八一の『南京新唱』を読み傾倒、以後秋艸道人に師事するに至った。また、鎌倉転居後、一時、松岡静雄に上代文学や言語学等を学んだ。彼の作歌は万葉ますらおぶりを尊び、師風を承けて格調を重んじた。戦時中、短期間歌誌「博物」同人となったこともあるが、特に結社に属さず歌壇のアウトサイダーとして、独自の道を歩んだ。万葉集・良寛・正岡子規・会津八一等が彼の思想と作歌の基調を形成したともいえるが、また、彼の書も極めてユニークなもので、評価が高い。歌集は『荅径集』(昭11)、『早梅集』(昭22)、『寒蟬集』(昭22)、『含紅集』(昭42—死後の刊行)等があり、なお、『寒蟬集』と『晴

陰集』の二部より成る『吉野秀雄歌集』(昭33)は第十回読売文学賞を受けた。また、昭和四十二年には第一回逍空賞を受賞している。このほか『良寛歌集』(昭27)、

『良寛和尚の人と歌』(昭32)、『短歌とは何か』(昭28)等の著書や、随筆集『やはらかな心』(昭41)、『心のふるさと』(昭42)等があり、また、会津八一全集の編集委員をつとめたり、『定本八木重吉詩集』(昭33)や『花と空と祈り』(重吉詩稿) (昭34)等の編纂もある。その全貌は『吉野秀雄全集』全九卷(昭44-45)で知られる。『定本吉野秀雄全歌集』全三卷(昭52)もある。

①弘法麦の枯かれいろさむき砂浜にわが子らを据たもとゑ麵麩めんぷを食はしむ

②家に遠きかかる小路に遊ぶ子をわれは見つけて言かけず過ぐ

③幼子は死にゆく母とつゆ知らで釣りこし魚の魚籃いさなごを覗のぞかす

④をさな兒の兄は弟をばげまして臨終いまだの母の脛すねさすりつつ

⑤母死にて四日泣きあしをさながら今朝登校す一人また一人

⑥疎開せる子を訪ねきて道端に杏食わんじひ合ふ泣かむおもひに

①は歌集『昔径集』より抄出。「晚秋初冬」一連の中にあり、昭和十年作である。子らというのは長女皆子（八才）、次男陽一（五才）、三男壮児（二才）等であろうか？（長男は生後間もなく死し、二女結子は未だ生まれていない）。作者は鎌倉に住んでいたもので、その海岸に子らを連れて行ったのであろう。弘法麦というのは「香付子」で、「はますげ」の塊状の地下茎で、乾燥して漢方薬にする。海辺の砂地に産し、葉は叢生で硬い。その弘法麦が初冬なので枯れた色を呈しているさむぎむとした海岸に、子ども達を坐らせてパンを食わせた、というのであるが、「一首の眼目はへわが子らを据ゑ」でへここにすわれ」と命じている父親の姿が目に見えぬ。個人的でリアルな表現だ」（片山貞美『鑑賞吉野秀雄の秀歌』昭52・8）といわれるが、今どきのただ子どもにベタベ

タするやわな父親でなく、どこか勤い父親を私が感ずるのは、私の深読みすぎるであろうか？

②は歌集『早梅集』より抄出。「をさな子」一連の中にある。子どもというものは思いがけない処で遊ぶものである。時には家からはるか離れた遠くの「こんな処」と思われるような場所に遠征して遊んでいる。そして、それを見つけた時の親の驚きと、親が知らぬ処で子どもは遊ぶものだということを認知する不思議な感慨とが、この歌にはにじみ出ているように思われる。しかも、女親のようにすぐ駆け寄るのでなく、「言葉をかけないで通り過ぎた」というところに、いかにも男親らしい愛情のようなのものが揺曳していて、私は好きな一首である。③から⑤までは歌集『寒蟬集』より抄出。巻頭の「玉簾花」と題する群作の中にある。「昭和十九年夏妻はつ子胃を病みて鎌倉佐藤外科に入院し遂に再び起きたず八月二十九日四児を残して命絶えき享年四十二会津八一人戒名を授けたまひて淑真院积尼貞初といふ」という詞書がある。この一連についての自らの解説は、木俣修と共著の

互評自註歌集『寒蟬集』(昭24・6)の自註に詳しいし、また前述の自著『やはらかな心』には「検査の結果胃の中にできた肉腫しゅという難症と判明し、やがて両肩と右腕への転移も認められ、もはやどうすることもできず、ひと月ともたぬ八月末、あえなく奪われてしまった。本人にはむろんしまいまで知らせなかったが、これが別れたという予感があったらしく、家を出る前にとっておきの砂糖であんこを煮、饅頭を作って子らに食べさせ、日記・手紙類は焼き捨て、覚悟をきめたようすで入院していった。警戒警報の鳴りひびく町に病人をかき寄せた人力車がのろのろと動いていき、そのあとに暗澹たんとして従う者がつまりわたしであった」と、妻の発病から死去までのせつない経緯を書き記している。子ども達をのこして死にゆく彼女も哀れであるが、その子ども達の姿も具体的に作品に描かれていて涙を誘う。

③は「自註」によると、壮児と結子が滑川で釣をした帰り、鱈はくちや鯊はくちの獲物を母に見せようとして病院に立寄ったのを、あるがままに作歌した、という。子どもという

ものは母親が重態でもこういうことをするものであり、そのことが子供の特徴を現わすことによって、却ってこの場合の母子の置かれた事態を強く読者にうったえる効果を発揮している。

④は事柄自体が悲痛である。十五才の陽一と十二才の壮児が母の両脚を一本ずつかかえてさすっている、弟は昼間の疲れから居眠りするのを、兄は年かさだけに叱って目をさまさせさまさせ、脛すねをさすりつづけている、と作者は説明している。作者は一見非情の如くそれを突放したように描いているが、むろん腸がちぎれる思いで堪えているのであり、「慟哭とうこくのはげしき、なげきの深さ」(川島泰一『吉野秀雄論』昭53・5)が、つたわってくるのである。

⑤は母親が死亡した後の子ども達の生態を示している。この歌の前に「葬とらひの済みてもろびと去りゆけば疲れきりたる子らは丸寝す」という作があり、続いてこの歌があるので内容がよくわかる。悲しみ、心労、人の集散等で疲れ切って「丸寝」(着替えをせずに寝ること)

をしていた子ども達も、四日間泣き続けていたがやっと  
気をとり直したのか、今朝は登校した、というのである  
が、それも一斉でなく「一人また一人」という字余りの  
具象的表現が、子ども等の行動を端的によく示してい  
る。

⑥は同じく『寒蟬集』の「夏季小吟」一連中の作。群  
馬県富岡市に疎開中の二児のようすを見に来たが、本願  
寺説教所の骨棚に預けてある亡妻のお骨にも会い、お布  
施を納めたら梵妻が庭の杏をとってくれた。婦りの道端  
に腰を下して子どもと杏を食った、というのが日記の内  
容のようだが、「泣かむおもひに」という結句が、作者  
の胸が張り裂けるような思いであったことをよく示して  
いる。

### (34) 木俣 修

修は本名修二、明治三十九年、滋賀県愛知郡愛知川町  
に生まれた。家は代々、井伊家の（彦根藩）城代家老で  
あったという。父は当時、郡役所に勤務していた。滋賀

県師範学校を経て、昭和六年東京高師文科卒業、直ちに  
宮城師範に赴任した。昭和九年旧制富山高校に転任、十  
六年妻しま子死去、翌十七年前谷しな子と再婚した。十  
八年職を辞して富山から上京、玉川学園等に勤め、かた  
わら歌誌「多摩」の編集や師北原白秋の遺著の整理にあ  
たる。戦後の二十六年、昭和女子大教授となる。三十七  
年、日本近代文学館常任理事、四十二年『昭和短歌史』  
その他一連の近代文学研究で文学博士。同年秋、実践女  
子大教授となった。四十八年紫綬褒章を受ける。四十九  
年『木俣修歌集』により「芸術選奨文部大臣賞」受賞。  
五十六年実践女子大退職。五十八年「日本芸術院恩賜  
賞」に内定したが、その受賞を待たず四月四日、腎不全  
のため死去、七十六才であった。

彼は小学校時代から「赤い鳥」の詩友となり、綴方・  
自由詩・自由画を投稿したといわれる。師範在学中に作  
歌を始め「日光」の詩友となる。高師在学中の昭和二  
年、北原白秋を訪ねて、そのすすめで「香蘭」参加、編  
集に当る。昭和十年白秋が前述の「多摩」を創刊するや

これに参加、熱心に作歌すると共に白秋歌風の闡明につとめた(昭和二十七年「多摩短歌会」解散まで、その幹部であった)。昭和二十一年、短歌雑誌「八雲」の編集顧問となり、編集者の久保田正文と共に戦後歌壇に新機運を起し、これは「短歌新潮」に続いた。昭和二十八年歌誌「形成」を創刊主宰し、没年に及んだ。彼は日頃「短歌を文学の広場へ」と言い、「作歌の根底をヒューマニズムに置いた」「心情に根ざす人間的立場」(「短歌」昭和57・2「詩集・木俣修」所収、上田三四二「木俣修の歌論」)だったといわれ、「短歌というものは、つねに作者のヒューマンドキュメントでなければならぬ、というのが持論」(同誌所収、大西民子「木俣修・私のノート」)であったともいわれる。また、玉城徹のように「木俣は、日本においては珍らしく徹底した〈市民〉のタイプを実現している」が、「根本において保守的だ」という見解(「短歌現代」昭和58・7「特集追悼・木俣修」所収、玉城「木俣修の短歌」)もある。

彼の歌集は『高志』(昭17)、『みちのく』(昭22)、『冬

曆』(昭23)、『流砂』(昭26)を始め、最後の『雪山雪後』(昭56)に至るまで十二冊ある。また、『白秋研究』

I・II(昭29~30)のような白秋研究もの、前述の『昭和短歌史』(昭39)、『大正短歌史』(昭46)のような近代短歌史研究、『万葉集一時代と作品』(昭41)、『今昔物語』上下(昭51)のような古典もの、その他、歌論集や随筆集も少なくない。更に、与謝野晶子全集や吉井勇全集等の編纂や、『明治の歌人』(昭44)、『現代短歌の現流』(昭38)等の共編物等著書は極めて多く、近代短歌史の専門家として近來最も多くのしごとをした存在といっても過言ではないであろう。

① 少女子のいのちいちづに削りゆく鉄にほひたち寒き  
冬の日

② 外にはずむ木々のみどりを庄す如して五月まひるの  
吾子のうぶごゑ

③ 冷え徹る夜の壕にし泣きわめくみどりごを抱きたど  
きなきかも

④ 幼子は鮭のはらごのひと粒をまなこつむりて吞みく

だしたり

⑤ 浮浪児と女子警官と映されぬ背景にさくらの花咲き  
みちて

⑥ 焼跡に蜻蛉を捕るとけふもゆくたたかひの記憶なき  
幼子よ

⑦ タンバリンうちてリズムに遊ぶ子らあかるき未来来  
よこの子らに

⑧ 枝わたる小鳥も啼かず罪もてる児らもみな噤み冬の  
少年院

①から③までは歌集『流砂』より抄出。この歌集は戦中と終戦直後の作品を取めたものだけに、その頃の世相が色濃く投影している。①は「鉄微塵」という一連にあるが、この歌の前に「鉄削る少女なりしか旋盤の寒きうなりにひた真對ひて」があるから、恐らく旋盤の軍需工場に動員されている女子学生の状態をうたったのだから。戦局の緊張を背景に、寒い冬の日に鉄がにおいたつという表現がいかに新鮮でリアルで、工場内の雰囲気と必死に働く少女たちとを、みごとに描いている。

②は「新生―高志生る」の最初の一首で、この作者が三十八才で始めて子を得た喜びが、ひしひしと伝わってくる。産声が五月の木々のみどりを圧する如くに、という表現がユニークである。次に「若葉照る坂下りつつ昂ぶりのつねにしあらず吾子は生れたり」の歌もある。しかしこの長男は後で六才で夭折する。それをうたった作者の亡児詠は抄出しないが、痛切である。

③は「壕」という一連にあり、防空壕の冷えが徹ってくる寒い中で泣きわめく嬰兒を抱いておろおろと困惑している作者が目に見えるようだ。「たどきなし」は、たよりない、たのみないの意。

④から⑥までは歌集『冬曆』から抄出。「寒時雨」一連中の歌。「はらい」(腹子)は「はららご」で、魚類の卵塊を塩漬けにした食品だ。鮭の腹子は「すじこ」というが、筆者も幼時、ビタミン豊富ということ、よくこれを親から吞まされたが、気味が悪いので眼をつむって鵜呑みにした。そのなつかしい思い出が、この歌を読むと蘇える。本書には「幼子はあやしむごとく顔よせて

にはふ木通<sup>まきどお</sup>を食はむともせず」という似た歌もある。

⑤は浮浪児と女子警官とを素材にした点で珍らしい。

共に戦後間もなく出現したものとして、歴史的なものだからである。この歌は映画の一場面でもうたったものか？ 作者は『流砂』の中でも「地下道の夜にものを食む浮浪児はやがてその位置にねむりかゆかむ」という作をのこしている。

⑥もまた「焼跡」という戦後風景を描出している。その焼跡にも蜻蛉が飛んでいる。それを捕えようと毎日出かける子は、あのいまわしい戦争の記憶もないのだ、という親の複雑な感懐である。

⑦は歌集『歯車』（昭30）より抄出。この歌集の歌が作られた昭和二十六年から二十八年に亘る三年間及びその前後には、一方では次男（24・7出生）や三男（26・9出生）を得ているが、他方では長男（25・8逝去）を失っている。特に長男を失った悲しみは作者を悲歎のドン底に突き落とし、長く苦悩せしめた。それだけに生きている子どもらに「明るい未来が来よ」と祈る願いは切

実であったろう。「タンバリンをうっ」て遊ぶ子ら、というのが何かフレッシュで明るさを醸している。

⑧は歌集『呼べば飴<sup>アメ</sup>』（昭39）所収。私はこの歌を含む「この少女たち」と題する五十首の群作を「短歌」昭35・4月号に初めて読んだときひどく感動して、その後、拙著『非行を見る』（昭43・5）の「短歌に現われた少年非行」にとりあげて、批評したことがある。どこか「みちのく」の少年院の院児たちをうたったもので、素材としても珍らしく、また、木俣らしくヒューマンなうたい方であった。非行少年をうたう作品としては出色のものだったのである。⑧は小鳥も啼かず、院児らも口をつぐんでしゃべらない、という何か心象めいたものの詠出で、少年院の雰囲気を出している。なお、木俣は「脱走の少年囚の捕はれし街を包みてこの夜雪降る」（歌集『愛染無限』所収）という作などもあり、この種の少年たちに関心の深い歌人だったと思われる、法務省矯正局関係の雑誌「刑政」（矯正協会発行）の短歌の選を長く続けていたことも、付記しよう。（お茶の水女子大学）